

と、民衆世界の成熟との相互の所産だったのではなからうか。従って、「豊臣の平和」は專業兵士集団に対する軍縮とは並行せず、それゆえ不安定性を内包していた。これを安定した所与の条件のようにとらえた評価は、自覚的に見直す必要があると考える。

〈東洋史部会〉

長沙子彈庫楚帛書群に見える月名について

COE客員研究助手 森

和

本発表は、「楚帛書」に関する諸問題の中でも特に注目され、様々な角度から議論されてきた月名と暦法をめぐる問題を採り上げ、同じ墓葬から出土した第二帛書・残帛書を含めた「子彈庫楚帛書群」全体の中で再検討を行い、その史料性格や位置付けを展望する試みである。楚帛書は一九四二年九月に湖南省長沙市の古墓から盗掘された文書で、中央に天地を逆にした八行と十三行の文章（八行文・十三行文）、周囲に十二の神怪図像と短文、三文字の表題（辺文・辺題）が書かれている。その辺題・辺文に見える「取・女・秉・余・欽・獻・倉・臧・玄・易・姑・壘」の十二の文字（辺文月）については、李学勤氏が最も早い段階で『爾雅』釈天に「正月爲陬」などとする月名と一致することを指摘し、そこから楚帛書の暦法が取月を歳首とする建寅夏至と判断し、ほぼ定説とされている。一方、包

平成一五年度早稲田大学史学会大会報告

山楚簡などの楚簡では「留郢・郢郢・高月・郢郢・八月・九月・十月・亥月・獻馬・各柰・屈柰・遠柰」という楚固有の月名（楚月名）が常用され、その暦法については諸説あって定見を見ないが、楚帛書とは異なるものと見做されてきた。しかし、十三行文には「一月」から「五月」まで序数詞を用いた別の月名（十三行月）が見え、さらに現在ではアメリカ・サクラ美術館の所蔵する残帛書に楚月名が確認されており、子彈庫楚帛書群にこれら三種類の月名が並存する。これら辺文月・十三行月・楚月名の並存を起点としてその対応関係を検討し、①辺題・辺文には相対的な月序と四時の順序しか示されておらず、「取」から「壘」までの何月から一年が始まるのかを楚帛書自体から判断するのは困難である点、②楚帛書と『爾雅』釈天との先後関係が明確でない点、③辺題があたかも神怪の名前の如く配され、一部は辺文の宜忌と対応し、あるいは「秉司晝（春）」のように職掌を示すような「四時を司る」という表現が用いられ、同時にその四時の月を境界として押韻している点、という三点に基づいて、本来、神怪の名前として職掌をも示した辺題三文字のうち、冒頭第一字目が独立して月名として見做され、それが採録された結果『爾雅』釈天の記載になったと考えられること、そのため『爾雅』釈天を前提として楚帛書と楚簡の暦法が異なるとする従来の見解に対し、楚帛書群が他の楚簡同様、戦国時代の楚国領域内で行われていた所謂「楚暦」（その内容については研究者により解釈が異なる）に基づく史料であるという仮説を提示した。そして、その妥当性を

検証するために、従来の見解が暦法の相違を官方・民間という用いる主体の相違や時代差から解釈していることに對し、刃文の分析を通じて楚帛書の宜忌が民間のみならず国君にまで及ぶ官方をも対象としていることを明らかにし、また五行説を一つの指標として楚帛書群と九店楚簡「日書」・包山楚簡「卜筮祭禱記録」とを比較し、五行説の痕跡が不完全な形で認められる楚帛書群の戦国中期晩段という考古学的年代が、その範圍を戦国晩期早段とされる九店楚簡「日書」寄り、紀元前一七八年の拔郢前後に想定し得る可能性を指摘した。以上のような過程で、子彈庫楚帛書群が包山楚簡や九店楚簡などと同様に楚曆に基づく術数関係のテキストで、民間あるいは官方といった社会における特定の階層を対象とするような性格の史料ではないことを論証した。これにより、楚系文字資料の中でその独自性から他とは一線を画して扱われてきた子彈庫楚帛書群が他の楚簡などと同じ土壌・背景を共有していることが明らかにされ、工藤元男氏が想定されるような葬送儀礼における「卜筮祭禱記録」から「日書」へと一連の流れの中で位置付けることが可能になった。

宋代三級行政体制の形成 ―元豐帳法の分析から―

小林 隆 道

宋王朝は唐末以来の分裂割拠の状況を收拾し中央集権体制を整え

た。その際に重要な役割を果たしたのが転運使である。その転運使の管轄範圍は路と呼ばれ、至道三年（九九七）に一五路が制定されると幾州かをまとめる制度化された広域区画となった。後に転運使の他に提点刑獄司、提举常平司が増設されこれら監司が並立するが、この路は宋一代を通じて監察区画として位置づけられている。しかし、路は時代が下るに従い実際には行政的役割を担うようになり、後世の広域行政区画である省への過渡期としてとらえられている。路制の変遷は中国史上における広域行政区画の出現を考える際に極めて重要な考察対象である。本発表では、「県↓州↓路↓中央」という会計報告経路がどのように形成されたかを跡付けることを通して、「路州県」という三級制の地方統治機関で行政を行う体制が形成される状況を考察していく。

従来、会計報告は路の機関を介さず州から中央に直接なされるものであった。しかし、元豐三年（一〇八〇）に路を介する会計報告制度に改められた。本発表ではこれを「元豐帳法」と呼ぶ。蘇轍の上奏「論戸部乞収諸路帳状」を見ると、熙寧年間に文書点検の専門機関を設立するなど、それまで中央における文書処理改革が行われていたが文書量の多さが原因でどれも失敗に終り、この元豐帳法成立に到ったのであった。

元豐三年以前の状況を見ることで、その状況を変えた元豐帳法の意義を考えていく。天禧二年（一〇一八）には、州から中央と路に報告する文書が重複しており、州の負担となっている問題が起きて